

今週の為替相場見通し (2019年1月15日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		107.77 ~ 109.09	108.55	107.00 ~ 110.00
ユーロ	(ドル)		1.1393 ~ 1.1570	1.1473	1.1300 ~ 1.1700
(1ユーロ=)	(円)		123.43 ~ 125.09	124.45	122.50 ~ 127.00
英ポンド	(ドル)		1.2707 ~ 1.2866	1.2838	1.2700 ~ 1.3000
(1英ポンド=)	(円)	*	137.45 ~ 139.49	139.32	137.50 ~ 141.00
豪ドル	(ドル)		0.7110 ~ 0.7235	0.7217	0.7100 ~ 0.7350
(1豪ドル=)	(円)	*	77.03 ~ 78.35	78.29	77.00 ~ 79.00

(データ) 先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 網島 正佑記

(1) 今週の予想レンジ: 107.00 ~ 110.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

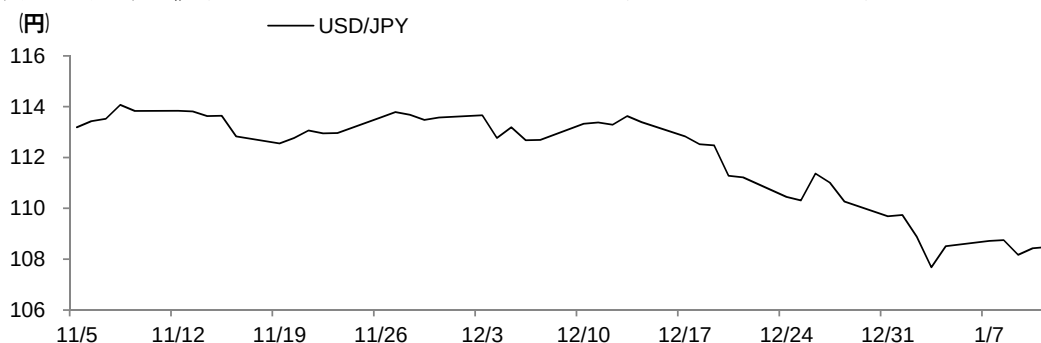
先週のドル/円相場は108円台を中心にもみ合い展開となった。週初7日、108円台後半で取引を開始したドル/円はドル安の流れの中、上値重く推移し108円台前半まで下落。欧州時間入り後も上値重い展開が継続したが、北米時間に米ロス商務長官が米中通商協議について前向きな見方を示したことを受けてリスクセンチメントが改善する中、反転上昇。米12月ISM非製造業指数が予想を下回る結果となるも、反応は限定的。翌8日も上昇の流れを引き継ぎ、週高値となる109.09円まで上昇。しかしながら、109円台では戻り売り圧力も強く、108円台後半で揉みあい推移。9日も108円台後半を中心に推移したが、北米時間に入り、ボスティック・アトランタ連銀総裁やエバンス・シカゴ連銀総裁から「金利は中立金利に近づいた可能性」や「Fedは辛抱強くなれる」など弱気な発言が続いたことを受けて、ドルが売られる中ドル/円についても下落。さらに、その後に発表された12月FOMC議事要旨において追加利上げに対して慎重な姿勢が示されたことを受けて108.00円割れまで下落幅を拡大。翌10日も上値重い展開が継続し、週安値となる107.77円まで下落となったが、パウエルFRB議長の発言を受け米国債利回りが上昇する中、ドル円は108円台半ばまで反発。11日、米12月CPIの発表を控える中、108円台前半から半ばにかけて小動きとなったが、結果は予想対比横ばいとなり影響は限定的。その後、ユーロ下落を受けてドル買いが強まる中、ドル/円は108円台半ばまで上昇し108.55円で越週。

今週のドル/円は底堅い推移を予想する。先週行われた米中通商協議では具体的な内容は示されなかったものの、米中間で「幅広く・深く・綿密な連絡」を取るとの声明が発表された。また、当初予定を延長し協議を行ったことや、上記のような米ロス商務長官からも前向きな発言が出ていること等から、解決に向けた米中双方の歩み寄りを確認することができる。これらを踏まえれば、世界経済における大きなリスクの一つとしてあげられる米中貿易摩擦が解決へ向かっていると考えることができよう。またFed関係者からのコメントを見ても、より慎重かつ柔軟な姿勢を確認することができ、昨年末からの金融市場の混乱も足元では一旦落ち着きを見せている中でリスクセンチメントの改善に連れドル円は底堅い推移を予想する。一方で、米政府機関閉鎖が過去最長となるなど不安定要素も燦々の中で積極的に上値を追う展開とはなりにくい。

(3) 先週までの相場の推移

先週 (1/7~1/11) の値動き:

安値 107.77 円 高値 109.09 円 終値 108.55 円



(資料) ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 山本 一暁

(1) 今週の予想レンジ: 1.1300 ~ 1.1700 122.50 ~ 127.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

週明け7日、1.13台後半でスタートしたユーロ/ドルは、対アジア通貨や対豪ドルでドル売りが優勢となる中、じり高の展開。海外時間に入っても、ユーロ/円的大幅上昇にもサポートされながら1.1483まで上値を伸ばした。ユーロ/円は、日米株価の底堅い値動きを横目に123円台半ば水準から上昇を開始。124円台前半では短期的なストップロス巻き込みながら、一時、124.80円を付けた。8日、ドイツ鉱工業生産が市場予想を大きく割り込む結果となったことや米金利が上昇したことを受けて、ユーロ/ドルは上値を抑えられたが、欧州実需勢の買い意欲が相応にあった模様で1.1450絡みで揉み合い推移。ユーロ/円についても、124.50円を挟んでの一進一退となり、方向感に欠ける展開に終始した。9日、北米時間、米地区連銀総裁が利下げの可能性に言及したことやFOMC議事録で「追加利上げの時期がより不透明になった」とハト派と解釈される内容が見られたことからドル売りが強まると、ユーロ/ドルは急騰。レジスタンスとして意識されてきた1.15前後のストップロスを巻き込むと、1.15台半ばの売りオーダーをこなしながら、一時、1.1560まで急伸した。その間、ユーロ/円も124円台半ばから、一時、週高値となる125.09円を付けるも、ユーロ/ドル上昇がドル/円下落に相殺される格好で、上値は限定的となった。10日、前日海外時間の流れを引き継ぎ、東京時間にユーロ/ドルは週高値となる1.1570を付けた。しかし、海外時間では米金利上昇を受けたドル買戻しの流れに、ユーロ/ドルは1.15ちょうど近辺まで戻り売られた。その間、ユーロ/円は、ユーロ/ドル下落とドル/円上昇に挟まれ、124円台後半水準でこう着状態となった。11日、米CPIは市場予想通りの結果となり相場への影響は限定的となったが、ポジション調整と見られる利食い売りにユーロ/ドルは反落し1.1470台、ユーロ/円も同様に124円台半ばまで小緩んで越週した。

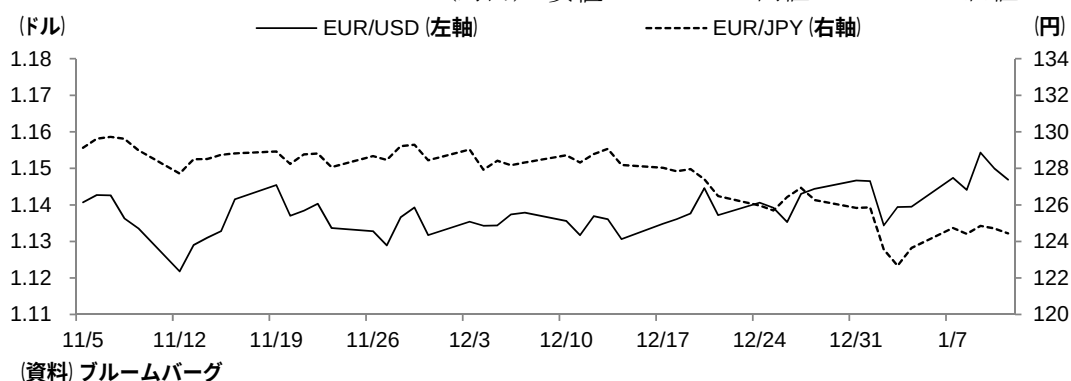
今週の、ユーロ相場は底堅い展開を予想する。先週の米中通商協議では、知財保護等の構造的な問題を棚上げしたうえで貿易不均衡問題を中国側の輸入大幅拡大によって解決する方向性が打ち出された模様で、米国による追加関税措置への警戒感はやや和らいでいる。したがって、対ドルでアジアエマージング通貨や資源国通貨の買戻し圧力が一層高まると考え、対ユーロでもドルは弱含むと予想する。弱気な株価指数や経済指標の悪化傾向に配慮したFEDがハト的な姿勢を見せている点もドル売り材料のひとつとされよう。ユーロのダウンサイドリスクとしては、15日(火)に英国議会におけるEU離脱案に関する採決が注目される。否決され、続いて総選挙等が議論され始めれば政局不安から欧州通貨は売られる見込み。ただ、否決については既に織り込みが進んでおり、EU側と離脱交渉延期協議等の可能性が模索されるようだと、ポンド買戻しが進みユーロも連れ高になるだろう。14日(月)ユーロ圏11月鉱工業生産、17日(木)ユーロ圏12月消費者物価指数、ラウテンシュレガーECB理事講演等が予定されている他、株価の趨勢を見る上でも、米企業決算も確認しておきたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/7~1/11)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1393 高値 1.1570 終値 1.1473

(対円) 安値 123.43 高値 125.09 終値 124.45



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2700 ~ 1.3000 137.50 ~ 141.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、対ドル、対円では概ね横這いと言える小動きだったが、対ユーロでは、11日まで小幅ながらほぼ一方的に水準を切り下げ、週明け直前に下落分を払拭した。9日には米地区連銀の総裁が相次いで追加利上げに消極的な発言をし、ドルが軟調に振れたが、そのドルに対しても横這いにとどまったのは、ドルと同様に軟調だったと判断するのが妥当と考えらる。ポンド軟調の要因を敢えて挙げるとすると、英のEU離脱交渉を巡る英政府の混乱が挙げられるだろう。英議会は、9日以降、政府の離脱合意に関する審議に入ったが、英歳出法の修正案(8日)、離脱交渉関連の期限法案の修正案(9日)が、政府の意向を否定する形で、立て続けに可決された。両修正案は、それぞれ野党労働党、与党保守党の残留派議員から提出されたもので、いずれもその狙いは合意なき離脱の回避にあった。前者は、仮に合意なき離脱となった場合、政府に、議会の承認なしに合意なき離脱に対応するための予算(歳出)の捻出をできなくする修正で、後者は、仮に15日に予定される採決でメイ首相の合意案が否決された場合、政府に3会期日以内に代替案を提出することを義務付けた。11日に発表された英11月製造業/鉱工業生産は、当該PMIの改善にもかかわらず、予想を下回る低調で、ポンド全面下押しを誘った。しかし、その後、ロンドンの夕刊紙が、英閣僚の発言として、「離脱期限延長の可能性が高まった」との観測を報じると、ポンドは小幅ながら全面高に。ほどなく、対ドル、対円では天井を打って反落したが、対ユーロでは高止まりしたまま週の取引を終えた。

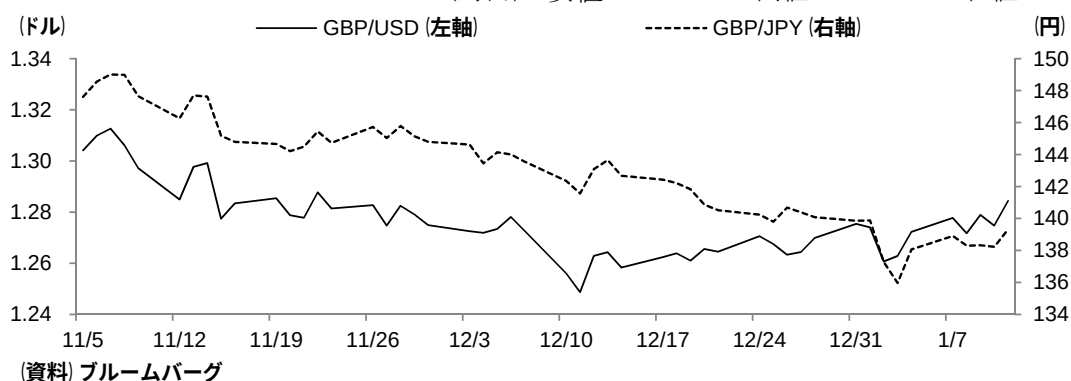
今週の英ポンド相場は、離脱関連の報道に踊らされる、荒っぽい値動きを予想。ポンドの今後を占う上で、11日の現地報を受けた値動きは、対ユーロでのポンド軟調の主因が合意なき離脱への警戒感であった可能性(だからこそ離脱延期の報に一方的な反発を見せた)と、離脱延期がポンド買い要因と読まれる可能性とを色濃く示唆した。売りか、買いかは今後の報道の内容次第だが、当面は観測報道などに激しく右往左往させられる神経質な値動きが続く可能性が高いだろう。15日に予定される、メイ首相の離脱合意の採決は、引き続き否決の可能性が濃厚だが、通貨市場も既に否決を織り込んだ感がある。万が一可決となれば、おそらくポンドは急騰すると見込まれるが、その可能性は低いだろう。9日に可決された上述修正案を受け、政府は、21日までに代替案を議会に提出すると見込まれているが、1年半の交渉を経てやっとまとめた合意案の代替案を、僅か数日で提出できるとは考え難い。交渉が振り出しに戻ることで、期限切れ=合意なき離脱に陥る可能性は高まることになるが、同時にそれは、離脱延期、ひいては離脱取り止めの可能性の高まりとも読める。白か、黒か、正反対の結果のどちらに転がるか、全く読めない状況がポンド予想を難しくしている。合意なき離脱が、おそらく3月末ぎりぎりまで「確定的」とはならない一方、仮に、英政府が離脱延期をEUに申請すれば(今週中に離脱延期が決まるとも考え難いが)、その時点で、取り敢えずはポンドを買える環境になろう。今週は、16日(水)に英12月CPI、18日(金)に英12月小売売上高と主要経済指標の発表が並ぶが、こうした環境で、ポンドが材料視する可能性は低いと見込む。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/7~1/11)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2707 高値 1.2866 終値 1.2838

(対円) 安値 137.45 高値 139.49 終値 139.32



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 今村 加奈子

(1) 今週の予想レンジ: 0.7100 ~ 0.7350 77.00 ~ 79.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は、0.71前半から0.72前半へ上昇した。7日、豪ドルは0.71前半で取引が始まり、1月3日の豪ドル0.67台へ急落から0.70台へ急上昇の記憶鮮明な中、やや神経質な様相も見受けられたが、主要株式がプラス圏に戻ると安堵感が広まり、豪ドルは0.7100をサポートし0.71前半中心の取引となった。米アトランタ地区連銀ボストイック総裁発言「2019年利上げ回数は1回と予想・弱い景況感が世界的に広まっている」を受けドル売りに傾き、豪ドルは0.71半ばまで上昇した。市場の焦点である米中通商協議が7日から始まり、その進展具合待ちで動き難かった。8日、豪ドルは0.7160近辺まで上昇し、予想より低い豪州11月貿易黒字額の結果に失望し0.71前半へ小反落した。その後、0.71半ばでもみ合いが続いた。9日、昨年12月のFOMC議事録で「多くのメンバーが将来の利上げに忍耐を持つことが可能」が示されドル売り、豪ドルは0.71後半まで上昇。10日、数々のFEDメンバー発言が慎重な利上げ姿勢へ傾き始め、0.71後半中心の商いへレンジを切り上げた。11日、豪州11月小売売上高の予想より若干高い0.4%を好感し豪ドルは0.72前半へ上昇、注目された米12月消費者物価指数は予想通りの結果ながら前年比1.9%と2%を下回る結果を確認、豪ドルは0.7200近辺で取引を終えた。

先週の豪ドル/円相場は77円近辺から78円前半まで上昇した。7日、豪ドル円は77円前半でオープン、アジアのみならず欧米株式の動向を見極めようと慎重な姿勢の中、77円前半で横ばい推移が続く。米株式上昇を確認すると77円半ばへやや強含んだ。翌日、米国の一部政府機関閉鎖や米中通商協議など取り巻く環境は不透明ながら77円半ば中心の商いへ若干レンジを切り上げた。9日、米国金利引上げ鈍化の可能性が取り沙汰され、FED要人発言では利上げに慎重なコメントが多くなったのを受け、豪ドル円は78円前半まで上昇した後、見慣れた77円台で推移した。11日、豪ドル円は上値テストを継続、78円前半まで上昇し2週間ぶりの水準を回復した。

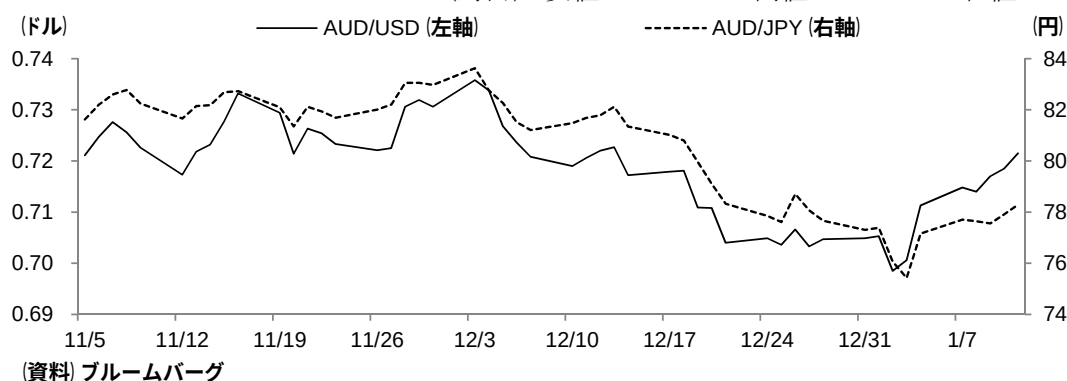
今週の豪ドルは、慎重な米金利引上げ姿勢に傾いていることから豪ドルは上値テストし易く、0.72台レンジへ移行できるか注目したい。今週は主要国の経済指標発表より、政治的なイベントに焦点があたり易いだろう。なかでも、米政府一部の機関閉鎖の行方や、15日(火)の英国議会でEU離脱協定案の採決などが上げられる。また、米中通商協議の進展具合も重要な市場材料となっている。原油(WTI)価格は在庫減を好感してUS\$50以上へ値を戻し豪ドルをサポート、その原油価格の動きも注視したい。豪ドルは0.7200を挟んだレンジへ切り上げるか、あるいは再度0.7200以下に落とされるか。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/7~1/11)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7110 高値 0.7235 終値 0.7217

(対円) 安値 77.03 高値 78.35 終値 78.29



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。